

(独立行政法人教員研修センター大学委嘱事業)

平成 21 年度 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

プログラム名	小学校外国語活動スタート研修：指導技術と英語運用力アップ
プログラムの 特徴	平成 20 年 3 月に学習指導要領が改訂され平成 23 年度には小学校に「外国語活動」が正課として新設される。改訂に伴い『英語ノート』が配布されたが、これまでの英語活動の指導方法や内容などは千差万別で、必修化された場合、英語を教えた経験がない教員は多くの課題を抱えている。本研修は、教育委員会と連携し、指導技術と英語運用力アップ研修を提供し、研修用の教材や映像（DVD）の作成・配布も含め、短期間でより効果的な指導法及び必要な英語運用力を習得させることを目的としている。

平成 22 年 3 月

機関名：神田外語大学 / 連携先：茂原市教育委員会

プログラムの全体概要

I. 開発の目的・方法・組織

文部科学省（以下、文科省）は平成20年3月に学習指導要領を改訂し、平成23年度より全国の小学校高学年（5、6年生）に外国語（実質的には「英語」）を正課として導入すべく「外国語活動」を新設し、その改訂に伴って『英語ノート』を配布した。小学校での英語の導入は、文科省の2002年7月『『英語が使える日本人』のための戦略構想』（以下、「戦略構想」）、2003年3月の『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』（以下、「行動計画」）の発表などで既定路線化しており、既にほとんどの小学校で何らかの形で行われてきている。しかし、導入の方法や内容、時間数などは千差万別で必修化されるとなると、英語の指導法についての教育を受けてきていない教員が大部分の小学校では、クリアしなくてはならない多くのハードルが存在する。『英語ノート』という指針となる共通教材が配付されたとはいえ、年間35時間におよぶ外国語活動を効果的に行うには、周到な指導体制の構築が望ましく、特に、実際に指導の責任を持つ小学校高学年の学級担任の「英語指導力」の育成、「英語運用力」の向上は焦眉の急である。

1.1 開発目的

こうした現状に鑑み、神田外語大学は、外国語教育を専門としてこれまで培ってきた「英語教育に関わる研究と教育」を結集して、特に「小学校での英語活動に特化した指導法と英語運用力」の育成のための研修モデルプログラムを、千葉県茂原市教育委員会と連携し、茂原市内の小学校教員に短期間でより効果的な「外国語活動の指導法」及び「その指導に必要な英語運用力」を習得させることを目的として、開発した。

この研修プログラムは、茂原市教育委員会との緻密な連携により、管下における小学校教員の現状とニーズを踏まえた効果的かつ継続的に波及効果のあるものを目指し、受講者の直近のニーズに配慮しながらも、「外国語（英語）教授法」と「英語の体系」という2つの学問分野を軸とし、小学校英語教育全般を俯瞰できる教員の養成を目指した。この点において、ここ数年、民間の英語教育施設などを中心に様々な形態や内容で数多く開校されている児童英語教師養成講座やプログラム（多くは「場当たりの」「対処療法的」な印象であるが）とは一線を画したものとなった。「小学校外国語活動」（ひいては、「外国語（英語）教育」）全体を意識することができれば、日々の1つ1つの活動が、独立した単体ではなく導入済みの事項と導入予定事項とも有機的につながりを持たせた活動として位置づけることができる。そうした関連づけを効果的に行うことこそが、限られた表現であっても豊かなコミュニケーションを可能とする土台となるのであり、各単元・レッスンで導入された表現や活動が、その単元・レッスンを超えて運用できるようになる。日々の英語活動に必要な技術と英語力を養成するにしても、それだけで完結するのではなく、受講者には、その活動が（小学校英語だけでなくそれ以降の）英語教育や英語力とどのようにつながるかといったより大きな目標に照らし、児童の反応や教材に応じて、可変的に導入法、指導法を自ら工夫、開発できるような基礎を獲得してもらうことを、本研修プログラムは目指したのである。

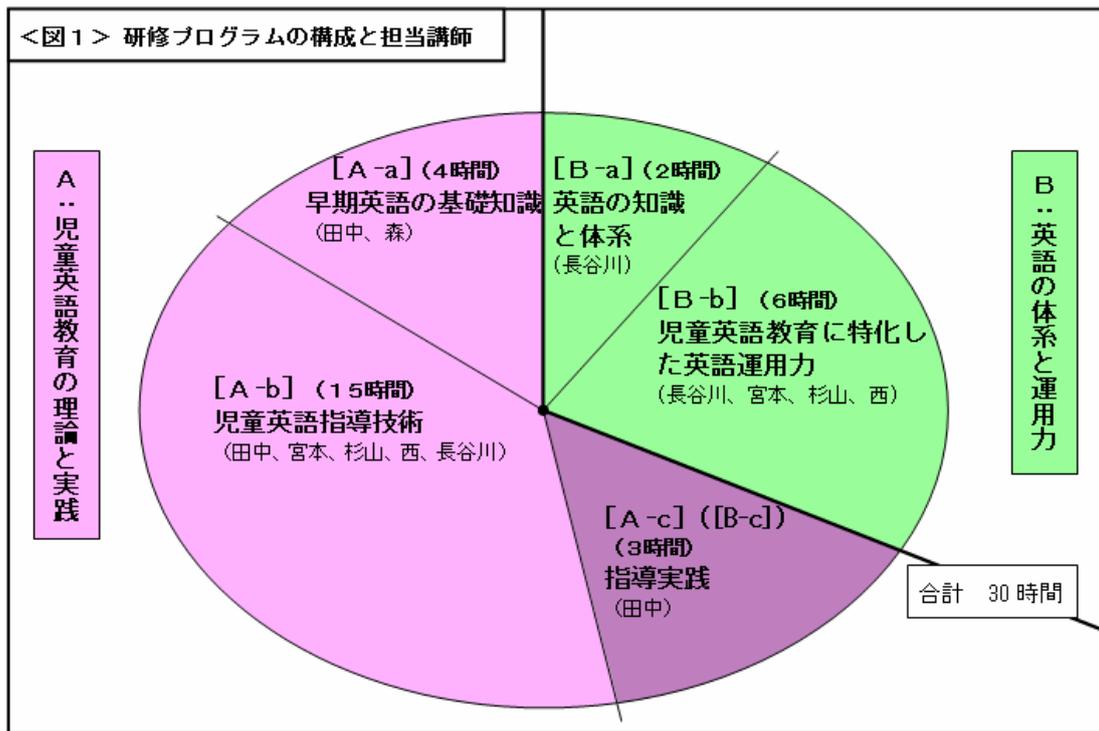
1.2 開発の方法

本学は、法人（佐野学園）の発足以来、常に、日本における英語教育に先導的・革新的な役割を果たしてきた。そして、小学校英語教育関係については、文科省が小学校に英語の導入を検討し始める大分以前より、法人内に「神田キッズクラブ」を擁し児童英語教育を実践し、また、学部教育においては「児童英語教員養成課程」を他大学に先行して発足させ、英語指導技術や教室活動とかかわる実践的、具体的ノウハウを幅広く蓄積してきた。また、系統立てた児童外国語（英語）教育にかかわる研究や実践報告は、青年や成人向けの英語教育に比べ、世界的にも未だ限られているが、本学では、すでに、公的資金による「指導者養成」「児童英語で獲得できる英語力」「英語の体系から見た児童英語のカタチ」などをテーマに研究〔注¹〕を進めており、本研修プログラムにはそれらの成果からの知見が十全に生かされている。

さらに、本学では、平成21年4月に、こうしたこれまでの児童英語教育関係の実践と基礎研究を集約し、継続的体系的に発展させ、学内外へ組織的に発信させるべく「児童英語教育研究センター；Center for Teaching English to Children (CTEC)」を設置した。このセンター（以下、CTEC）の発足により、本研修プログラム（夏期集中研修及びそのフォローアップ研修）は、CTECが中核となって組織的、かつ効率的に運営・統括・実施することが可能となり、具体的には、以下<図1>に示した内容と構成を持つ「研修プログラム」の本体となる「夏期集中研修」を長谷川大学院教授（CTEC顧問）と田中教授（CTE副センター長）、森指導主事（千葉県教育長指導主事）を中心に検討を重ね企画・遂行した。

¹ 早期英語指導者研修のあり方に関する研究：(7) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(B)『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（2004年4月～2007年3月）；(i) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（2007年4月～2010年3月）（本研修講師の田中講師、宮本講師はこうした研究の主要研究メンバーである。）

早期英語の特徴と早期英語能力に関する研究：(7) (独) 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター研究開発プログラム「脳科学と教育」（タイプII）委託研究『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』（2004年12月～2010年3月）；(i) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)『早期英語教育教材に見る語彙と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（2008年4月～2011年3月）（本研修の長谷川講師はこうした研究の代表者、主要研究メンバーである。）



本研修の基本的な考え方と全体の構成と概要は以下の通りである。[注²]

(1) **研修内容の全体的構成と講師の陣容**： 児童英語教育分野は大きく分けて、[A：児童英語教育の理論と実践]と[B：英語の体系及び運用力]から成る。[A]については、本学の「児童英語教員養成課程」担当の田中真紀子教授（CTEC副センター長）、CTEC専任教員の宮本弦講師、および「神田キッズクラブ」からの講師陣（杉山みゆき講師、西尚子講師）を中心に、[B]については、大学院の長谷川信子教授（英語の体系）を軸に、英語運用力向上研修には、宮本講師、杉山講師、西講師も加わった体制とした。（[A]については、教育委員会サイドからも、森秀夫指導主事により、学習指導要領での小学校英語の位置づけ、茂原市の体制と現状分析なども提示された。）

(2) **研修の基本的考え方と内容**： 上記の[A：児童英語教育の理論と実践]と[B：英語の体系及び運用力]の両面から小学校英語活動の全体像を提示するが、限られた研修時間内で、現場での効果的な英語の導入ができるようになるために、「実践的」な活動に重きを置く。これは、以下「1.3 開発体制」でも触れるが、教育委員会サイドとの意見交換、連携により、合意・確認した考え方でもあり、特に、以下の点について、留意した。

- [A]の重点は「指導技術の育成・伝授」（上記の図の[A-b]）とする。つまり、小学校英語は「英語にふれさせる」ことが目的であることから、その最も効果的かつ応用力のある「指導技術」「活動パターン」を重点的かつ体系的に伝授、育成する。具体的には、『英語ノート』から出発するが「場当たりのスキル」ではなく、教材、内容、現場の状況に応じ可変的にアレンジできる応用力を養う。

² 「研修プログラム」における具体的な講座名と内容の記述については、以下の[II：開発の実際とその成果]を参照されたい。

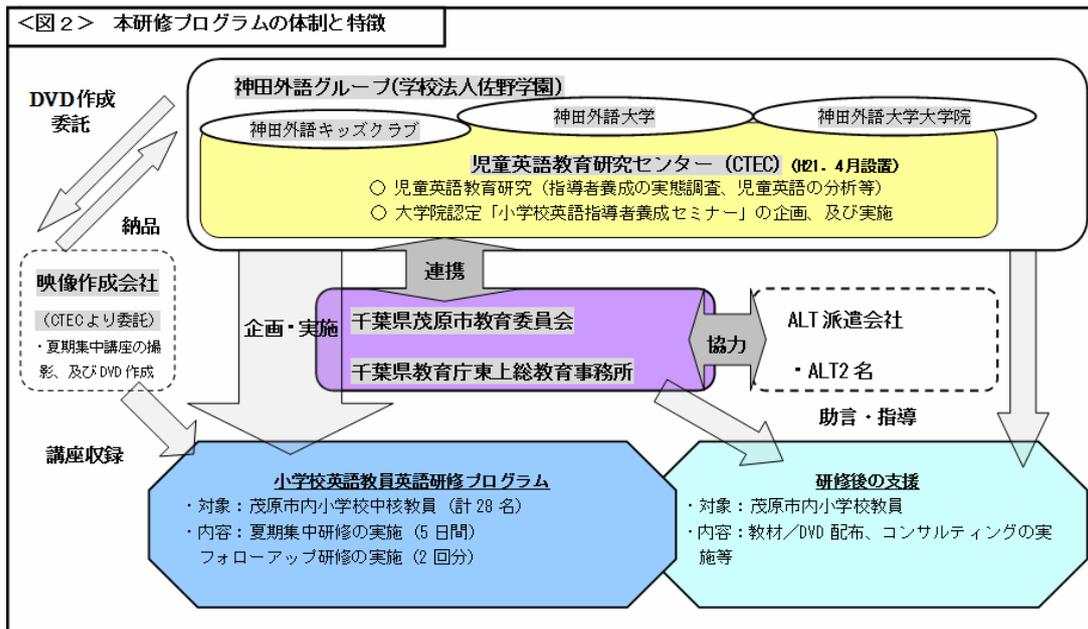
- [B] の重点は「英語運用力の向上」（上記の図 [B-b]）とする。外国語活動に必要な運用力として、教員には英語検定 3 級程度が求められているが、本学のこれまでの研究（[注 1]参照）での『英語ノート』等の小学校英語教材の分析により、英語の体系・文法に照らせば「文法・語彙・会話状況」全てにおいてそれよりもさらに限定的なものでも、応用力を身につければ、十分対応できることが、明らかとなっている。本研修では、「英語運用力」を『英語ノート』などの児童英語教材に対応可能な「体系」に限定し、その限定範囲内で様々な教室場面や活動に応用の利く運用力の育成を目指した。それにより、教員は「英語苦手意識」や「英語力への不安」をある程度払拭することができ、自信をもって英語での授業に臨むことができるようになる。ちなみに、「英語運用力の向上」を目論む研修プログラムは多数あるが、このように小学校外国語活動に特化した英語運用力の向上を図るプログラムはほとんど例がなく、本研修の特徴である。
- 本研修の本体（夏期集中5日間、各日6時間、計30時間）とは別に、受講した教師の現場での実情に照らしたフォローアップを出張研修により行い、研修内容の定着、浸透を図った。同時に、受講者からの要望や質問、課題などを（集中研修中やその直後だけでなく）長期的・継続的に拾い上げ、各々の教員の現場の実態に即した改善点の提示や問題の解決にあたった。それは、同時に、本学（CTEC）での小学校英語に関する知見を高めることともなった。つまり、本研修プログラムは、単発のプログラムではなく、外国語活動を継続的に支援する長期的視点に立ったものである。

1.3 開発組織

本研修には、

- (a) 神田外語大学（CTEC）：研修プログラムの開発・提供
- (b) 受講者（小学校教員）：茂原市教育委員会の推薦による、現在および将来小学校英語活動において中核的役割を担う茂原市内の小学校教員 30 名（実質、28 名）
- (c) 茂原市教育委員会・千葉県教育庁東上総教育事務所：(a)による研修プログラムが、管下の教育体制の観点から(b)を推薦・選出し、その現状と課題に最も効果的に対応する内容となるよう(a)と連携・調整。

という 3 者が関わる研修プログラムである。その関係は、各々の役割も含め、以下の<図 2>に示したが、小学校での外国語（英語）活動は、実質的に現時点では外国語指導助手（ALT）が主導しているケースが多く見られることもあり、茂原市教育委員会と契約し ALT を派遣している会社の協力も得て、ALT も研修プログラムに一部参加する体制とした。夏期の 5 日間の集中研修は収録し、参加者および茂原市内の小学校に DVD として、使用された教材と共に配布し、研修後もその内容の定着、普及に寄与できる形とした。



研修プログラムの開発および研修での講師の陣容は以下<表1>の通りである。講師陣には、次節〔II：開発の実際とその成果〕でも述べるが、本研修プログラムに関わる〔A〕の「英語教育学・教授法」関連、〔B〕の「英語学」関連、各々の分野で理論的にも実践面でも経験豊かな陣容を配した。また、千葉県教育庁の英語指導主事が講師陣に加わることで、管下の実情に一層配慮した研修内容となった。

<表1> 本研修の開発体制および講師陣

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
(I) 開発体制				
1	神田外語大学院・教授（研究科長；言語科学研究センター長；児童英語教育研究センター・顧問）	長谷川信子	研修プログラム企画・開発責任、全体統括と連携、教材開発、プログラム総合評価	言語学（Ph. D.）、英語教育（MA） 〔研修講師兼務〕
	神田外語大学学事部・部長（児童英語教育研究センター長）	長田厚樹	研修プログラム運営・執行統括、教委・講師陣との連絡・調整統括	
2	茂原市教育委員会・教育部学校教育課長	内田達也	研修プログラム運営・連携、プログラム総合評価、小学校との連絡・調整統括	
	茂原市教育委員会・学校教育課副主幹	阿部倉光宏	研修プログラム運営・連携・評価、小学校との連絡・調整	
3	千葉県教育庁東上総教育事務所・指導主事	森秀夫	研修プログラム運営・連携、プログラム総合評価、小学校との連絡・調整統括	教育学（修士） 〔研修講師兼務〕

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
(Ⅱ) 講師				
1	開発体制参照	長谷川信子	開発体制参照	開発体制参照
3	開発体制参照	森秀夫	開発体制参照	開発体制参照
1	神田外語大学外国語学部 英米語学科・准教授（児童 英語教育研究センター・副 センター長）	田中真紀子	研修プログラム企画・開発・ 評価、研修講師	教育学〔応用言語 学〕(Ph. D.)、教育学 (MA)、英語教育（修 士）
	神田外語大学児童英語教 育研究センター・専任講師	宮本弦	研修プログラム企画・開発・ 評価、研修講師	英語教育研究（MA）、 早期英語教育（MA）
	神田外語キッズクラブ・講 師	杉山みゆき	研修講師、フォローアップ研 修評価	
	神田外語キッズクラブ・講 師	西尚子	研修講師、フォローアップ研 修評価	英文学（修士）
(Ⅲ) その他				
1	神田外語大学児童英語教 育研究センター・研究員	本多 正敏	教委・講師陣との連絡・調整、 事務処理、教材・資料編纂責 任	言語学（修士）

※ 表中の「No」は、組織ごとの番号を示す

(1. 神田外語大学／2. 茂原市教育委員会／3. 千葉県教育庁東上総教育事務所)

II. 開発の実際とその成果

2.1 研修／講座のねらい

本研修は、小学校英語活動において中核的役割を担うことが期待されている茂原市教育委員会管下の小学校教員に短期間で「英語指導技術」と「英語運用力」の向上を目指すものであり、各々の背景には、[A: 児童英語教育の理論と実践]、[B: 英語の体系及び運用力]と関わる理論的学問分野（「英語教育学」「英語学」）があるが、現場の小学校教員は概してより実践的で即効性のある講座・研修を希望する傾向が強い。そうした内容は、そのまま教室に持ち帰ってすぐに授業で使うことができ、「英語を教えられる」気持ちになれるからであろう。そして実際、それが自信へとつながり、やがて指導技術も向上していく可能性もある。しかし土台のない建物は早晚崩れるように、基礎や背景の脆弱な場当たりの授業はやがては行き詰まり、真の「自信と実力」につながることは稀である。また建物をそのままそっくり右から左へ移すだけで、その構造や組み立て方を知らなければ、現場に即した対応も、補修も利かない。すなわち英語教育や教授法の理論的背景、英語という言語全体の体系に裏打ちされた視点がなければ、「指導技術」も「英語運用力」にも自ずと限界があり、教師も自信を持って授業に臨むことは難しいであろう。

そこで本研修は、受講者が研修後には少しでも自信を持って授業を行うことができるようになること、各々の現場の実情に応じて可変的、継続的に指導技術および英語運用力の向上を志向するようになること、を目標に企画・開発した。本研修の本体である夏期集中研修の構成は上記（４頁）の＜図１＞に示したが、30時間の研修時間のうち、[A][B]両分野の理論的基礎となる講座（[Aa]、[Ba]に属するもの）も6時間（20%）を配し、残りの24時間（80%）の実践的、即効的内容の講座の基盤を提供する形態とした。＜図１＞に対応する具体的な講義とその概要、講師のリストは＜表２＞の通りである。また、これらの講座で用いられた配付資料については、以下[IV その他]の付録「配付資料一覧」を参照されたい。

＜表２＞ 夏期集中研修の講座科目（領域・科目名（時数込み）・担当講師内容）

領域	科目（時数）	担当講師	内容概略
児童英語教育の理論と実践 [A]	早期英語の基礎知識 (a) (4時間)	1. 小学校における外国語活動課題と解決の手立て (2)	森秀夫 茂原市内小学校における外国語活動の課題（導入の背景・目的、ITにおける担任/ALTの役割等）を概観し、解決に向けての手立てを提案する。
		2. 早期英語教育概論 (2)	田中真紀子 早期英語の基礎知識（年齢と言語学習、外国語としての英語学習等）を概説し、理論に基づき、早期英語教育の意義や効果的な教授法を学ぶ。
	指導技術 (b) (15時間)	3. 児童英語教材研究 (2)	宮本弦 児童英語教材（絵本）や『英語ノート』を使って、子どもに英語を教えるためのワークシートの意義や開発・活用方法を考える。
		4. 『英語ノート』概観 (3)	長谷川信子 『(英語ノートの)指導資料』の語彙と文法を中心に概観し、児童/HRT/ALTに使用・理解することが期待される英語活動と表現を考える。
		5. ゲームの使い方 (2)	杉山みゆき 授業の目標を達成する手段としてのゲームの位置付けを理解し、ゲームの狙いと学習者の習熟度に合わせたゲームの選択方法を考える。
		6. 歌・チャンツの使い方 (2)	西尚子 歌やチャンツを用いた指導において、習得目標の表現をどのようにリズムにのせるか、指導上の留意点は何かを応用方法も含めて考える。
		7. 物語・劇を使った指導 (2)	田中真紀子 英語の物語を使って、読み聞かせのための英語スキルを練習し、英語習得に結びつく読み聞かせの指導方法や劇としての利用方法を学ぶ。
		8. 指導技術<高学年> (4)	杉山みゆき 西尚子 講師による実演後、研修参加者は『英語ノート』と『指導資料』に従って授業の展開方法を詳細に考え、模擬授業（IT）を実践する。
		指導実践 (c) (3時間)	9. 授業観察 (3)

領域		科目（時数）	担当講師	内容概略
英語の体系と運用力「B」	英語の知識の体系 (a) (2時間)	10. 児童英語と英語力 (2)	長谷川信子	小学校外国語活動と中学校外国語科の目標におけるスキル獲得の違いを、英語を用いる場面やタスクに焦点を当て、語彙・文法から明らかにする。
	英語運用 (b) (6時間)	11. 基礎英文法演習(2)	長谷川信子	ことば(英語・日本語)の基本的な体系を理解することで、外国語活動の指導において参加者自身が必要とする英語力(の目標)を考える。
		12. 早期英語発音演習(2)	宮本弦	市販のチャンツ集を使ってリズム活動を行いながら、外国語活動指導者のための発音トレーニングの理論・方法を紹介する。
		13. 教室英語演習(2)	杉山みゆき 西尚子	『指導資料』を用いて、発音、簡単な文法の説明や応用表現を紹介し、子どもにとって簡単に、分かりやすい教室英語を考える。
		合計時間数 30		

<表2> (および<図1>)での領域の記号([A] [B]、(a)(b)(c))について簡単に説明しておきたい。

[A] [B] というのは、上述した学問分野(「A: 英語教育」、「B: 英語学」)に対応し、[A] 分野関係では22時間(73%) (うち(c)の3時間には[B] 分野も含む)、[B] 分野関係では8時間(17%)とし、各々の分野の「理論的」「実践的」「総合的」性質に照らし、それぞれ、(a)、(b)、(c)と分類した。

- (a): 「理論的」視点を持ち、分野全体と背景と関わるものであり、講義形式が中心。([A] 分野4時間、[B] 分野2時間、計6時間)
- (b): 「実践的」「技術的」「即効的」で、受講者の積極的な参加を促し、グループワークなどを多用したワークショップ形式の科目。([A] 分野15時間、[B] 分野6時間、計21時間)
- (c): 両分野(殊に[A] 分野)の(a)(b)を取り入れ、実際の授業活動とその展開を意識した総合的な応用科目。([A] [B] 両分野に関わり計3時間)

各々の講座・科目について、以下により詳しく述べる。

2.2 実施方法

本研修は、その本体としての「夏期集中研修」(8月末、1日6時間、連続5日間、合計30時間;会場は、コンピュータやAV施設が完備した神田外語大学の教室)と、夏期研修後、現場の小学校に出張して、受講者の実践を通しての経験や課題などについて助言、協議する「フォローアップ研修」(12月と1月に各1日数時間)の2段階の研修である。

「夏期集中研修」は、上記<図1><表2>にその内容を提示したが、より詳しく、2.2.1で述べる。「フォローアップ研修」については、2.2.2で述べる。

2.2.1 夏期集中研修の実施について

<表2>に提示した夏期集中講座の実施については、講座の特性にもよるが、講師間で以下の点に留意することを心がけた。

- 1) 実践的な授業を通して、受講者の英語力の向上を促す機会をできる限り作る。
- 2) 受講者が学校に持ち帰ってすぐに使えるよう、『英語ノート』を基本的な教材とする。
- 3) 一方的な講師中心の講義形式の授業ではなく、受講者参加型の授業を心がける。
- 4) 理論的な内容もデモンストレーションを通して、実践につなげる。
- 5) 本研修に ALT の参加が可能となった一部の講座においては、ALT を積極的に活用する。ALT が主導して授業が行われることが多いのが実情だが、今回の研修では、ALT はあくまでもその役割が担任教員 (HRT) のサポート役であることを明確にし、ALT と HRT の効果的連携、ALT はいかに HRT をサポートできるか、HRT と ALT の本来あるべきチームティーチング (TT)、という観点から参加してもらった。

以下では、先ず、<表2>に示した各講座について、扱った具体的な [内容] (知識・技術の習得)、及び、[実施形態] を記す。記号や口座番号、授業時間数などは<表2>に対応している。実際の実施スケジュール<表3>は15頁に示す。

A. 児童英語教育の理論と実践

本研修の一つの目的である「指導力の向上」に関しては、「小学校英語活動」を英語教育全体の観点から位置づけた後で、小学校英語に特徴的とも言える、ゲームや歌、チャンツ、また読み聞かせの指導法など、実践を通して指導した。さらに、教材開発の方法や高学年を対象とした英語指導の方法を講義で扱った。

(a) 早期英語の基礎知識 (4 時間)

本夏期集中研修全体の導入として、即効的な講座ではないが、小学校英語活動の位置づけ、考え方、意義など、小学校以降の英語教育も視野に入れ、その全体の方向や課題を考える上での基盤を提示した。

1. 「小学校における外国語活動課題と解決の手立て」 (2 時間)

[内容] 千葉県東上総教育事務所管内の小学校における外国語活動の目的と背景、TT における学級担任/ALT の役割を概観し、学級担任が抱えやすい問題等、解決に向けての手立てを提案した。また授業を振り返るための視点、小中連携のあり方、コミュニケーション能力の捉え方、『英語ノート』の扱い方や工夫等について提示した。

[実施形態] パワーポイントを使つての講義中心の授業。しかし講座の導入時にはペアワークや簡単な活動を取り入れながら、外国語活動で使える活動を warm up として取り入れ、受講者が外国語活動の楽しさを体験できるように工夫した。

2. 「早期英語教育概論」 (2 時間)

[内容] 早英語教育理論に基づき、特に、早期英語の基礎知識 (年齢と言語学習、外国語としての英語学習等) および、早期英語教育の意義や効果的な教授法を概説した。

[実施形態] 前半部分の早期英語教育の知識については、受講者を中心に小学校英語教育に関する疑問や不安についてディスカッションが行われ、その解決策や方法を参加者全

員で検討した。後半の教授法に関しては、実践を通していくつか教授法を体験してもらった。

(b) 児童英語指導技術 (15 時間)

小学校英語活動に特徴的な実践的活動を扱い、『英語ノート』(および、その内容と連動した「電子黒板」の活用)に準拠した効果的な導入法をワークショップ形式を中心に展開した。



3. 「児童英語教材研究」 (2 時間)

[内容] 児童英語におけるワークシートの意義と開発、活用方法を紹介し、『英語ノート』を使って実際にワークシートを体験してもらった。

[実施形態] ワークショップを通してどのような工夫をしたら効果的にワークシートを用いて活動ができるか受講者全員で一緒に考えた。またワークシートの活動を実体験してもらった。

4. 「『英語ノート』概観」 (3 時間)

[内容] 『英語ノート』の指導資料の中の語彙と文法を概観し、児童、学級担任、ALT に使用、理解することが期待される英語活動と表現を紹介した。

[実施形態] 『英語ノート』の中から特に学級担任に必要な英語力と関わる語彙や文法事項を、受講者自らの英語の知識に照らし体系化できるよう、資料を豊富に用意した。英語の体系と関わり、講義が中心となったが、資料に基づき、受講者各人が、導入事項を継続的に整理する手立てを示した。

5. 「ゲームの使い方」 (2 時間)

[内容] 授業の目標を達成する手段としてのゲームの位置づけを理解し、児童の習熟度に合わせたゲームの選択方法、及びゲームがレessonプランやカリキュラムにおいてどのような役割を果たすのか等を、『英語ノート』の内容、活動に言及して受講者と一緒に考えた。

[実施形態] ワークショップを通して、受講者には実際に多種多様なゲームを体験してもらい、ゲームの楽しさのみならず、効果や問題点にも気付いてもらうよう指導した。



6. 「歌・チャンツの使い方」 (2時間)

【内容】 実際の授業ですぐに使用できるチャンツを紹介し、その応用方法を解説した。リズムの取り方、また習得目標の語彙、文章などをどのようにリズムにのせるか、さらに、生徒に分かりやすい指導のポイントは何かを実演指導した。

【実施形態】 ワークショップを通して、受講者にはチャンツの作成を体験してもらい、また自分たちでアレンジしたチャンツや歌を実演してもらった。

7. 「物語・劇を使った指導」 (2時間)

【内容】 この講座では実際の英語の物語を使って、子どもの英語習得に結びつく読み聞かせの方法を指導した。また読み聞かせを通して、英語の発音やイントネーション、読み聞かせのためのスキルを練習した。

【実施形態】 受講生には最終的にグループ単位で絵本を選び、グループ内で発音練習や読み聞かせのポイントを十分練習した後、クラスの前で読み聞かせを実践してもらった。ワークショップ形式で授業は行われた。



8. 「指導技術<高学年>」 (4時間)

【内容】 文部科学省作成の『英語ノート』用の「教授資料」の指導案を一つ一つ丁寧に読みながら、具体的な授業展開や応用方法、発展的な活動の紹介をし、演習を通して学んだ。また、電子黒板の利用法、ALT との協同授業の仕方を受講者と一緒に考えた。

【実施形態】 ワークショップ形式で、受講者にはグループでそれぞれ『英語ノート』のアク

ティビティーを用いて実際に ALT と協同授業をしてもらった。また電子黒板も実際に全員が操作体験できるように留意した。



(c) 指導実践 (3 時間)

夏期集中研修の終盤に配置し、[A] [B] 両分野の(a)理論と(b)実践を全て統合して実際の教室での活動、課題を考察した。

9. 「授業観察」 (3 時間)

[内容] この講義では受講者はいくつかの英語の授業をビデオを通して観察し、教授法、Teacher Talk、教師と生徒のやり取りなどの観点から授業内容を分析、授業において大切なポイントを受講者全員で考えた。また『英語ノート』の中からアクティビティーを選んで授業を計画し、模擬授業をしてもらった。模擬授業を通して、ALT を交えての担任主導型の授業方法を指導した。

[実施形態] ワークショップを通して、ALT との打ち合わせの方法、TT の仕方など実践を通して体得してもらい、最終的に担任教員と ALT による協同授業を行ってもらった。



B. 英語の体系と運用力

本研修のもう一つの目的である「英語運用力の向上」に関しては、英語の発音、および、小学校英語教育に必要な文法知識や語彙とその特性、クラスルーム・イングリッシュとその活用法などを講義し、特に、『英語ノート』で扱われている語彙、文構造を中心に小学校の英語教育ではどの程度の英語が必要とされるかを検討し、それに特化した形で、受講者の英語力

アップを目指した。



(a) 英語の知識と体系 (2 時間)

10. 「児童英語と英語力」 (2 時間)

[内容] 小学校外国語活動としての体験的コミュニケーションにおける英語と中学校（以降）の外国語科目における知識の獲得も含む英語の違いを、英語を用いる場面やタスクに焦点を当て、語彙・文法に言及してから明らかにした。

[実施形態] 受講者の英語知識の喚起を促し、受講者の知っている「知識としての英語」をどのように「クラスルームで使う英語」とするかを、(日本語にも共通する)言語の持つ特性を意識できる場面を想定しながら、教授用資料に基づき講義した。講義用資料は、受講者自らの英語の知識、英語力を考える上で後々参考となるよう汎用性のあるものとした。

(b) 児童英語教育に特化した英語運用力 (6 時間)

11. 「基礎英文法演習」 (2 時間)

[内容] 言葉（英語・日本語）の基本的な体系を理解することで、外国語活動の指導において受講者が必要とする英語力（の目標）を考える。上記 10 の講義を受け、『英語ノート』の「講義用資料」に提示され、HRT が使用することが想定されている表現を抽出したリストを用意し、受講者が自らの英語の知識の向上が目指せるよう構文や語彙を整理した。

[実施形態]、文法事項の整理などについては、講義が中心となったが、具体的な表現のいくつかを、使用場面を想定し、練習を行った。

12. 「早期英語発音演習」 (2 時間)

[内容] 市販のチャンツ集 (e.g. マザーグース) を使って、一緒に声を出しながら強勢リズム、及び発音トレーニングの理論と方法を紹介した。教材の選び方や実際の練習の手順を紹介し、絵本などの教材を使って発展的な練習も行った。

[実施形態] 絵本の読みの練習をする際のポイントと手順を紹介した後、受講者全員で発音練習をワークショップ形式で行った。

13. 「教室英語演習」 (2 時間)

[内容] この講座では英語ノートの指導者用資料を教材に用い、発音や簡単な文法説明、

応用表現を紹介し、簡単に児童に分かりやすい教室英語の使い手となるスキルを講義した。

【実施形態】ワークショップ形式で、実践を通して教室英語の練習を行った。

これらの講義は、具体的には、以下〈表3〉の日程で実施された。実施にあたっての講座の配置・運営には、以下の点を考慮した。

- 1) [A: 英語教育学関連] [B: 英語学関連] 各分野の(a)背景や理論的視点が提示されている講座を序盤に、(c)総合的講座科を終盤に配し、研修全体の狙いが把握できるようにした。
- 2) 夏期集中研修は、1日に6時間(午前9時30分～午後5時(休憩時間を含む))、連続5日間、合計30時間という、受講者には集中力を継続し続けるのは難しい日程、時間割であることを考慮し、上記1)の留意点以外は、1日の内容としては、タイプの異なる講座を組み合わせ、緊張感、集中力が持続しやすいよう配慮した。
- 3) 講座会場と隣接した部屋には、休憩時間、昼休み、講座後などに、受講者や担当講師がインフォーマルな雰囲気の中で十分意見交換、質疑応答できるよう配慮した。

〈表3〉 夏期集中研修との日程・講師・概要

夏期集中研修 (於: 神田外語大学1号館1F)		
日程	講座／講師	内容
2009 8/24 (月)	○早期英語教育概論／田中 ○小学校における外国語活動 課題と解決の手立て／森 ○児童英語と英語力／長谷川	・早期英語の基礎知識、意義、教授法 ・小学校英語の現状と課題 ・児童英語で身につく英語力
8/25 (火)	○『英語ノート』概観／長谷川 ○基礎英文法演習／長谷川 ○ゲームの使い方／杉山	・「英語ノート」の語彙と表現 ・児童英語の特徴を把握 ・ゲームの目的と活用指針
8/26 (水)	○『英語ノート』概観／長谷川 ○早期英語発音演習／宮本 ○歌・チャンツの使い方／西 ○児童英語教材研究／宮本	・「英語ノート」の語彙と文法 ・英語のリズムとイントネーション ・歌、チャンツの目的と活用指針 ・教材の開発
8/27 (木)	○教室英語演習・指導技術 〈高学年〉／杉山・西 ○授業観察／田中 ○物語・劇を使った指導／田中 ○児童英語教材研究／宮本	・指示のための英語表現、高学年 対象の指導技術、模擬授業(TT) ・授業観察と研究、模擬授業 ・物語や劇指導の理論と実際 ・教材の翻案
8/28 (金)	○教室英語演習・指導技術 〈高学年〉／杉山・西 ○授業観察／田中 ○物語・劇を使った指導／田中	・指示のための英語表現、高学年 対象の指導技術、模擬授業(TT) ・授業観察と研究、模擬授業 ・物語や劇指導の目的と活用指針

2.2.2 フォローアップ研修について

「夏期集中研修」を受けた教員による「外国語活動」の実際の授業を、児童英語教育の実践経験が豊富な神田キッズクラブ所属の杉山講師、西講師、千葉県教育庁の森指導主事が観察し、講評、指導を行い、より現場に即した授業の展開、および現場の教員の抱える問題などを協議し、より効果的な指導へ向けて受講者、講師が一体となって取り組んだ。フォローアップ研修は、同時に、講座を提供した神田外語大学（CTEC）サイドの観点からも、夏期集中研修の効果、その理解の定着と浸透、波及を、以下 2.3 で提示する「研修の成果や課題」に通じる具体的な項目にわたって聞き取り調査ができる機会となった。

フォローアップ研修の日程と内容は<表 4>の通りである。

<表 4>フォローアップ研修の日程・講師・概要

第一回フォローアップ研修（於：茂原市立鶴枝小学校）		
日程	講師	内容
(2009) 12/3 (木)	○授業展開／小野（授業者：担任単独） ○研究協議／小野（授業者）・森（講師）・杉山（講師）	・小野奈津子教諭（研修参加者：鶴枝小学校）による研究授業 ・小野教諭による授業説明、森講師による講評、杉山講師による講評と講義
第二回フォローアップ研修（於：茂原市立緑ヶ丘小学校）		
(2010) 1/27 (水)	○授業展開／杉崎（授業者：T1担任）・杉山（授業者：T2JTE／講師兼任） ○研究協議／杉崎（授業者）・杉山（授業者／講師）・森（講師）	・杉崎峰子教諭（研修参加者：緑ヶ丘小学校）と杉山講師による研究授業 ・杉崎教諭と杉山講師による授業説明、森講師による講評、杉山講師と研修参加者のコンサルティング

第2回目のフォローアップ研修では、どの小学校でも困難な課題としてあった「ALT と HRT の TT」を主題にし、杉山講師が ALT の役回りを演じることで、目指すべき TT のあり方の具体的なモデルを提示し、その講評と共に、そこへ至る可能性、筋道、課題などについて広く受講者を巻き込み協議、検討した。

2.3 研修の成果と課題

上記に記した本研修プログラムでは、「夏期集中研修」で、小学校英語活動の全般にわたり、理論的基盤も含め、指導技術、英語運用力、教室運営とモデル授業などを扱い、それを受けて、「フォローアップ研修」で、受講者の現場に即して、助言、指導、協議を行った。夏期研修後には、受講者に無記名でアンケートを行うと共に、講師および教育委員会サイドからも聞き取り、および文書により研修の成果と課題について討議する場を持った。また、フォローアップ研修での講評や討議において、研修内容の効果や浸透の度合い、同時に、改善が望まれる点などが明らかとなった。以下では、先ず、各々の「研修」について成果をまとめ、今後の課題について総合的に考察する。

2.3.1 研修の成果と課題

(ア)「夏期集中研修」について

夏期集中研修については、(a)外国語活動全般、(b)具体的な指導法と英語の運用力、(c)授業形態と教室運営の3点から考察する。

(a) 外国語活動全般

- 小学校での外国語活動と中学校（以降）の違いが明確になり、小学校への外国語活動の導入の経緯、位置づけ、狙い、目的の理解が浸透し、周知できた。
- 小学校での外国語活動については、正課であっても教科ではないことから、「学習指導要領」の解説と『英語ノート』の解説を除いては、学級担任にとって拠り所とするものがなかったが、本研修を通して一定の方向付けが与えられた。
- 教室運営の観察や模擬授業などの実践的な活動があり、授業のあり方、進め方に対する理解が深まり、受講者の授業運営に対する姿勢が明確化した。
- 小学校での英語活動の目的と内容が明確化されるに伴い、現場の教員の自らの英語力や教授技術に対して、目標とすべき具体的な項目などを設定し、自信の拠り所を形成することが可能となった。

(b) 具体的な指導法と英語の運用力

- 現場では、学級担任の英語苦手意識が原因で、『英語ノート』やその「指導の手引き」についても十分に理解しているとは言い難く、『英語ノート』が十分に活用されていないのが現状であったが、教師が身につけるべき英語力の概要が示され、また『英語ノート』の言語的分析が説明されたことで、授業を組み立てる際のポイントや見通しがもてるようになった。
- 『英語ノート』を用いた授業のモデルや授業展開のパターンが具体的に複数示され、各受講者の授業運営の可能性が広がった。
- 小学校外国語活動の目的、中学校以降の教科としての外国語の違いが明確になり、全て外国語（英語）で授業をやらなければならないという誤解が解け、外国語活動における効果的な英語の使い方に向けて積極的に取り組めるようになった。

(c) 授業形態と教室運営

- 現場では学級担任（HRT）が英語に自信のないことから、TTは、学級担任ではなく、ALTが主導権を握っている場合が多い。しかし、今回の研修を通して、その問題点が浮き彫りになり、その解決へ向け具体的に取り組めるようになった。
- HRTの英語力への自信のなさ、および、ALTの経験の豊富さなどから、これまで外国語活動は、ALTの経験に基づいて行われてきているケースが多いが、その内容は、小学校外国語活動の趣旨と必ずしも一致するとは限らない。本研修を通して、ALTと学級担任（HRT）の役割分担が明確に周知でき、本来あるべきHRTの主導により行われる活動への道筋を検討することができるようになった。
- 実際の教育現場では、HRTとALTとの間で十分な打ち合わせ時間が確保されていないだけでなく、打ち合わせ自体したことがないHRTが多数存在するというのが現状であるが、ALTが2日間研修に参加したことで、実情にあった打ち合わせができる道が拓けた。
- 本研修に茂原市教育委員会管下の複数の小学校（茂原市内小学校14校＋周辺校2校

の計 16 校) から、教員が参加し、5 日間にわたり活動を共にすることで、参加した教員が他の小学校の状況を把握し、学校間での情報交換を図ることができ、今後の協力関係も視野にいれる可能性が開けた。

(イ)「フォローアップ研修」について

フォローアップ研修では、夏期集中研修直後では気がつかなかった点、問題と考えられなかった点、逆に、現場での工夫が大きな成果につながった点などが、具体的な事例で明らかになった。また、受講者による実際の授業の展開は、同レベルの他の教員にとって身近なモデルの提示となり、個々の教員にとっては指導技術の向上への強いモチベーションとなり、また、自らの可能性へ向けての自信につながった。こうしたプラス成果と同時に、次項で述べる課題（特に、ALT と HRT の役割と TT のあり方）が、より鮮明になった。こうした課題は、研修だけで解決できることではなく、小学校での外国語活動の効果的な推進を文科省はじめ各地域の教育委員会の取り組み方にも関わるものである。そうした課題の本質が明確化できたことで、今後、具体的な対処が検討できる可能性もあると思われ、そうした認識を教員、教育委員会サイドと共有できたことも本研修の効果と言えよう。

2.3.2 研修の課題と今後に向けて

上記のような「成果」が確認できた一方で、研修について改善が望まれる点もある。以下では、(a)扱った内容について、(b)扱わなかった内容について、(c)検討が望まれる事項、について述べる

(a) 研修内容、形態について

- 理論系科目について： 本研修には、小学校英語活動全体を、「英語教育学」「英語学」という学問的な軸となる 2 つの分野からの理論的背景についての講座が 6 時間（20%）組み込まれていたが、そうした講座の重要性の把握・認識には至らなかった受講者も少なからず存在した。分野全体を俯瞰できる講師陣と、現場で日々の活動のあり方という「足元」「直近」の課題への対応で手一杯の受講者との「認識」の違いがあると思われる。「理論系講座」の重要性は上記で繰り返し述べたが、それが伝わらなかったことを真摯に受け止め、理論的な内容でも最低限必要な知識は実践を通して伝えるなど、講座のあり方や配布物の工夫など、改良の余地はあろう。
- 時間割、講座の構成について： 上記とも重なるが、本研修は<図 1><表 2>で示したように、「英語教育学」「英語学」という 2 つの分野に、「理論的」「実践的」「総合的」という座標軸を組み込み、全体として体系化された研修として企画したが、1 日 6 時間、連続 5 日間という高度に集中したスケジュールだったことから、「飽きがこないように」「集中力が持続するように」と、1 日の時間割には異なるタイプの授業を組み合わせた。しかし、それが返って、講座間の連携、関連が希薄な印象を与えた可能性もある。次回に同様の研修を行う場合には、日にち毎にテーマを揃え、同日内の講座間の連携を明確にするなどの工夫が考えられる。
- 講座内での体験する量について： 受講者数 30 名というのは、講座内容に照らして適当な人数だったと思われるが、指導技術にしても英語運用力にしても、受講者自身が体験的に試してみる、運用してみる機会は自ずと限られていた。ワークショップ

プ形式、グループワークのより効果的なあり方の検討と共に、講師以外の助手や他教員の動員を仰ぐなど、教員が体験できる場の提供が望まれる。そうしたことが十全に行われ、体験的活動に対する満足感が得られていたなら、上記の「理論系講座」に対しても異なる評価・感想が得られた可能性もある。

- 特定活動の導入の難しさについて： チャンツなど、受講者自らの外国語習得の経験の少ない活動については、その使い方や導入法を誤ると、児童や教師自身の興味を損ねる可能性がある。チャンツなどの特定の活動は、単体で考えるのではなく、英語の指導全体とどう結びつけ、教室英語の語彙をいかに増やしていくかといった総合的な視点が欠かせない。具体的な指導技術とその全体的な位置づけについてバランスのとれた配慮が望まれ、今後の検討課題となる。
- 本研修の内容とレベルについて： 本研修の内容が、英語を苦手としている小学校教員には高度すぎるとの指摘があった。中核的役割を担うことが期待されている教員の英語運用力、教室活動運営力をどの程度のものと想定し、狙うべきレベルをどこに設定するかなどは、教員の資質や能力をいかに把握・判定し、いかに各々のレベルにあった研修を開発するかという問題とも関わり、(日本における外国語活動全般に課せられた) 今後の課題である。

(b) 研修で扱わなかった内容について

- ALT と HRT の連携形態のあり方、可能性について： 本研修では茂原市で外国語活動を担当している2名のALTが、その派遣会社の協力により、限られた日数ではあったが参加し、ALT と HRT との連携の可能性を探った。しかし、それはあくまでも「研修上」でのことで、実際は、それなりに経験豊富で自信にあふれたALTからHRTが主導権を取るとは難しく、HRTによる授業への取り組みが生かされることは少ない。ALT とどのような形で連携することができるか、HRT が主導するためには何が必要か、ALT に何をどのように指示するか、など、HRT だけの問題ではなく、派遣会社を管轄する教育委員会との契約などとの関係もあり、今後の大きな課題である。しかし、どのような形態にせよ、小学校英語活動の本来のあり方が「HRT 主導によるALT とのTT」であるなら、本研修のようなHRT への研修だけでなく、ALT への体系的研修も望まれるところである。

(c) 今後の検討課題

- 受講者の力量とバラツキについて： 30 時間で扱う内容としては、小学校外国語活動の体系化も含め内容の濃いものであったが、受講者の力量にもばらつきがあることから、実際にどの程度、企画側が意図した研修内容が定着したかは、今後継続的に調査しなくては把握できないことである。フォローアップ研修での公開授業により、本研修の成果はある程度把握できたが、それを担当した教員が平均以上の力量の持ち主であったことは明らかで、その(成功)例だけで、全体への浸透、波及を一般化することはできないであろう。
- 本研修の浸透と受講者のレベルの相関について： 本研修の効果やその浸透と受講者の力量(英語運用力と指導技術)の相関が何らかの形で計量的に調査できるなら、文科省(または、教育委員会)による小学校教員への体系的な研修の必要性の有無、

そうした研修のあり方など、今後の日本の外国語教育施策に一石を投じる研究となろう。そうした判定法・評価法の開発も早急に必要となると思われる。

- 研修における受講者の参画活動・体験の量について： 30時間という限られた時間数（日数）で、いかに効果的に受講者に「体験し、使用し、実践する」場を提供するかは、今後の課題である。
- 講座間の内容的連携について： 講座の内容が、異なる講師の講座で、一部重複が見られた。事前に内容についての協議も行ったが、より詳細な打ち合わせなどが求められる。小学校外国語（英語）活動の本格導入を1年後に控え、本研修のようなものの必要性は強く認知されており、本学は、CTECの活動の重要な1つとして今後も継続的に提供する機会を持つことを検討している。今回の研修で得られた成果、課題を整理し、本研修で使用した配付物（以下 [IV その他] の付録「配付資料一覧」を参照されたい）の改訂も含め、研修用テキストの編纂なども考えており、講座間での連携を一層密にし、全体での統一を図るなら、不必要な「重複」なども必然的に避けられるものと思われる。

Ⅲ 連携による研修についての考察

本研修プログラムは、企画した本学の観点からも、連携した茂原市教育委員会の観点からも、そして、何より、受講した小学校教員の視点からも、有意義で相当の効果の上がったプログラムとして位置づけられる。こうした「成功」に至った背景には、上記3者の効果的な連携と各々のグループの役割の明確化とその遂行があげられる。以下では、こうした「連携を推進・維持できた理由」、「連携により得られた利点」、「今後の課題」について考察する。今後のこうした研修プログラム推進のための参考になれば幸いである。

3.1 連携を推進・維持できた理由

本学は、英語教育関係の事業などで、これまでも千葉県教育委員会とは様々な形態で協力関係を築いてきた。特に、千葉県教育庁の森秀夫指導主事とは、本学学事部長田厚樹部長（CTEC・センター長兼務）が面識があり、平成21年度の「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の募集要項が発表されてまもなく、本研修プログラムの申請に向けて、連携する方向で、長谷川信子大学院教授、田中真紀子教授、宮本弦講師を交え、申請に向け具体的な協議を開始した。それから申請までの、2ヶ月余りの間に、研修の概要、内容と実施形態、日程、講師陣、その他、申請書に盛り込むべき事項などについて、頻繁なメールの発信に加え、数回の会合により、討議を重ね申請書の作成に至った。

これほど短期間で、上述したように、非常に内容の濃い、また、受講者にも意義のある研修プログラムの開発・実施・運営・総括に至ったのには、以下の点があげられよう。

- 1) すでに、本学と千葉県教育委員会・千葉県教育庁とは、本研修プログラムの大本となる「英語教育」に関し、一定の信頼関係が成立しており、本学が提供する研修の質、運営方法などにおいても、受講者の選出や連絡の周知など教育委員会の協力が欠かせない部分においても、お互いが、真摯に対応してきたこと。
- 2) 本学が「早期英語教育」「児童英語教育」関係では、申請書作成段階でCTECの設置を予定していたなど、すでに、本研修プログラムの提供のような活動も含め、本学が培ってきた知見、ノウハウが、広く公に寄与する形で集積してきており、本研修プロ

グラムの申請が、その具体的な道筋となったこと。

- 3) 上記2)とも関わるが、本研修プログラムの遂行・運営に新設のCTECが、長田厚樹センター長、本多正敏研究員を中心に、組織として対応でき、講師陣の体制作り、教育委員会との連絡・連携、研修開催に関わる様々な教務的、事務的処理、研修当日の受講者への対応、DVD教材作成、本報告書作成にかかわる資料やデータの整理など、すべての面にわたり、円滑な遂行に大きな役割を果たすことができたこと。
- 4) 教育委員会サイドの実質的責任者としての森指導主事が、全ての研修日、会合に参加し、管下の小学校や受講者への事務的、内容的周知に尽力いただいたこと。
- 5) 研修プログラム開始以前に、本学サイド（CTEC、講師陣）が、小学校での実際の外国語活動を観察し、教員と意見交換するなどの機会を得て、研修の内容や方法など、現場のニーズを考慮することができたこと。

3.2 連携により得られる利点

連携により得られる利点は、すでに上記からも明らかだが、以下の点である。

- 1) 教育委員会の協力、許可なしには、公立小学校において、授業を観察したり課題について教員と忌憚のない意見交換をするなどは、ほとんど不可能である。本研修の企画段階からそうした機会を得られたことが、「当を得た」内容の提供につながると共に、小学校での外国語活動の実態を理解することにつながり、長期的に対処、研究するための基盤を得ることができた。
- 2) 教育委員会からの推薦により30名近くの「熱心な」「目的を一にした」受講者を得ることができ、それが「受講者の興味」を引き出し、講師陣の喜びにもつながり「教育効果」の向上に寄与するという、プラスのスパイラル効果が感じられた。
- 3) フォローアップ研修においても、参加した教員から、疑問点、問題点、課題といったネガティブな部分も「隠すことなく」積極的に提示する姿勢が見られたが、それは、本研修が、「営利」や「強制」などが関わらない、純粹に、「よりよい外国語活動を目指す」という共通の目的をもった3者（受講した教員、研修を提供する講師陣、教育委員会）によるものであったためである。そうした信頼関係を築くことができたのも、両者（受講者、講師陣）の連携の要となった教育委員会の存在があったからである。

3.3 今後の課題

上記のような連携関係を、今後も継続していくことが最大の課題である。そのためには、共通のプロジェクトなどの推進が欠かせないが、今回の「研修センター」による支援などの予算的な保証がなければ、容易ではない。本研修の主題となった「小学校での外国語活動の指導者の養成」は、外国語活動が本格導入される平成23年度以降、ますますその必要性、重要性が増すに違いない。連携すれば必ずやお互いに得られるであろうプラスの部分を、（補助金なしにでも）追求する手立てを模索しているところである。

（独）研修センターでも、そうしたニーズを認識し、「研修プログラム」の開発により得られた、人的ネットワークや信頼関係を維持していく重要性に鑑み、「具体的な研修プログラム」の実施とは異なる視点でも「支援」の可能性を考慮していただけるなら、単発の研修以上の長期的な波及が望めると思う次第である。

IV その他

[付録] 本研修プログラムにおける配付資料一覧

(1) 研修前配布物

- ・夏期集中研修全体の概要とスケジュール (配布日 H. 21 04/17 (金))
- ・夏期集中研修の各講義の内容の要旨・学内地図 (配布日 H. 21 07/08 (水))

(2) 夏期集中研修に用いられた研修 参考資料

※ 以下の文献は、研修資料集とは別に講座毎に配布された資料、及び講師が独自に作成した資料の出典である。番号および講座名はく表 2 > に対応している。

1. 小学校における外国語活動 課題と解決の手立て (森講師)

- ・「先生、分かってます?」『毎日新聞』2009.8.17 朝刊, 13 面.

2. 早期英語教育概論 (田中講師)

- ・田中真紀子. 2009. 『ゲーム／アクティビティー記入用紙』神田外語大学.
- ・文部科学省. 2009. 『小学校外国語活動研修ガイドブック』旺文社, 東京.

3. 児童英語教材研究 (宮本講師)

- ・宮本弦. 2009. 『絵本 Winnie the Witch を使ったワークシート』神田外語大学児童英語教育研究センター.

4. 『英語ノート概観』／10. 児童英語と英語力／基礎英文法演習 (長谷川講師)

- ・長谷川信子. 2009. 『『英語ノート』の「児童の英語活動の表現」の例』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子. 2009. 『『英語ノート』児童の語彙(形容詞)リスト』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子. 2009. 『『英語ノート』児童の語彙(名詞など)リスト』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子. 2009. 『『英語ノート』指導資料: 指導者の表現例: 出現語彙と例文のリスト』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子. 2009. 『ことばの木(イラスト)』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子. 2009. 『基礎英文法演習』神田外語大学大学院.
- ・長谷川信子・神谷昇・町田なほみ・長谷部郁子. 2009. 『『英語ノート』出現語彙の分析』神田外語大学大学院言語科学研究センター.

※ この資料は第9回小学校英語教育学会(JES)東京大会発表で用いたスライドを抜粋し、研修用に改編して配布。

- ・藤田英時. 2007. 『CD付き 知ってる英語なのになぜ聞き取れない?』ナツメ社, 東京. からの抜粋
- ・松香洋子. 2009. 『フォニックスってなんですか(第二版)』松香フォニックス研究所, 東京. からの「フォニックス規則の表」の抜粋

5. ゲームの使い方 (杉山講師)

- ・杉山みゆき. 2009. 『指導段階を意識したアクティビティ選択モデル』神田外語キッズクラブ.

12. 早期英語発音演習 (宮本講師)

- ・宮本弦. 2009. 『小学校指導者のための英語運用練習—マザー・グース チャンツ練習ノート—』 神田外語大学児童英語教育研究センター.

[参考資料] ※ 研修参加者用に休憩室で受け取り自由のものとして配布

- ・丸善キッズクラブ. 2009. 『小学校英語 おすすめ副教材リスト—英語ノートを発展させる教材で授業力アップを—』 丸善, 東京.

(3) 研修後の配布物

- ・夏期集中研修講座収録 DVD : (内容) 夏期集中研修の各講座を収録した DVD
: (配布日) H.21 10/23 (金)
- ・英語教材セット : (内容) Phonics 教材セット・ソングブック (CD 付)・
お天気カード
: (配布日) H.22 02/09 (火)

[キーワード]

外国語(英語)活動、指導技術、英語運用力、『英語ノート』、教室英語、児童英語教材、歌、チャンツ、物語、劇、早期英語発音、基礎英文法、授業観察

[人数規模]

- A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

[研修日数(回数)]

- A. 1日以内 (1回) B. 2～3日 (2～3回) C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以内 (10回以上)

【問い合わせ先】

神田外語大学

児童英語教育研究センター (Center for Teaching English to Children: CTEC)

〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉1丁目4番地1号

TEL: 043-273-1579 / FAX: 043-273-1726 / E-mail: ctec@kanda.kuis.ac.jp

茂原市教育委員会

教育部学校教育課

〒297-8511 千葉県茂原市道表1番地

TEL: 0475-20-1558 / FAX: 0475-20-1607 / E-mail: gakkou@city.mobara.chiba.jp